

## 博士學位論文内容の要旨

学位申請者氏名	大 原 眞 弓
論 文 題 目	平安時代の即位儀礼と仏舎利信仰 一代一度仏舎利使をめぐって
論文審査担当者	主 査 告 井 幸 男
	審査委員 梅 田 千 尋
	審査委員 桑 山 由 文

一代一度仏舎利使は平安時代から鎌倉時代にかけて、即位時に天皇が五畿七道の名社に仏舎利を奉獻し永祚長久・五穀豊穰を祈願する即位儀礼である。本研究の目的は、このような特異な神仏習合の即位儀礼は何時、何を目的に始められ、365年間31代にわたって継承され終焉に至った原因の問いに答えるものである。本論の構成は次の通りである。

### 序章

#### 第一章 仏舎利とその信仰

#### 第二章 日本における仏舎利信仰の展開

#### 第三章 一代一度仏舎利使の発遣

#### 第四章 即位儀礼の変化と一代一度仏舎利使

#### 第五章 一代一度仏舎利使の成立と終焉

### 終章

第一章では仏舎利信仰と仏舎利塔信仰に焦点を当て中国・日本への伝来過程を見る。仏舎利は釈迦の遺骨という本来のあり方から次第に神秘性を帯び、奇跡を起す聖遺物と信じられるようになった。『出三蔵記集』などによると、仏舎利は3世紀、三国時代の呉に伝わっていた。『日本書紀』によると、崇峻天皇元年（588）百濟から正式な外交により仏舎利・律師・寺工・画工などが来日し、法興寺（飛鳥寺）が建立され塔の心礎に仏舎利が埋納され、その後、法隆寺などの建立に伴っても塔の心礎に仏舎利が納められた。奈良時代になると仏舎利は仏堂に移され、仏舎利公開のために舍利容器が造られ、時代に合わせ意匠を凝らしたものとなった。奈良時代以降、渡海僧によって舍利が数多く日本にもたらされ、中でも鑑真と空海由来の仏舎利は最も正統な仏舎利とされた。また空海の提言で宮中真言院が造られ、東寺の仏舎利を移して後七日御修法がもたれ、断絶はあったものの現在も続いている。平安時代、舍利は密教で重要視され、神秘性を増幅するために能作性宝珠が作られた。

第二章では、天台・真言の舍利会の開始・目的・法会儀礼を中心に仏舎利信仰の一側面として天台宗及び真言宗の中でも東寺・仁和寺・高野山の舍利会を検証する。舍利会法会が公開され、享樂的法会になり、民衆化し、平安時代後期の末法思想と浄土信仰の浸透の中で、舍利信仰が極樂往生と易行という鎌倉仏教の特質を帯びていく点を追求し、新しい舍利信仰の姿を論じる。平

安時代の舎利会を総括すると、9世紀、舎利会の始まりと恒例化、10世紀、舎利会の認知度が高まり、舞楽四箇法要の娯楽化、11世紀、院政期に真言宗の大寺でも舎利会が行われ舎利会・舎利講の隆盛期、となる。また、新しく講式が造られ、短文の偈である舎利礼文、和文の讃嘆・和讃が盛り込まれるようになった。平安末期から、末法思想・浄土信仰・往生思想が広がる中で、仏舎利は特に極楽往生を助けるものとして崇敬し渴望された。短文の舎利礼文は念仏行者の念仏のように易行の往生修業として唱えられることもあった。

第三章では、一代一度仏舎利使の沿革・発遣の特徴を中心に検討する。文献上の初例は『日本紀略』天曆2年(948)9月22日条で、五畿七道の55社に仏舎利使を發遣したと記している。しかしそれ以前、仁和4年(888)、村上天皇の祖父宇多天皇が始めたと推測でき、宇多天皇を萌芽とし、村上天皇の代で制度として確立された。發遣の特徴は次の通りである。五畿七道の名社約50に仏舎利を奉納する。宇佐と石清水の八幡神には仏舎利以外に法服を添える。但し、伊勢神宮には仏舎利使の奉獻はない。陰陽寮の日時勘文に従って行う。仏舎利を納める舎利容器を名社の数だけ新造する。形態は銀製の内容器の壺と木製の外容器の塔(多宝塔)である。幼い僧・若沙弥を仏舎利奉獻の使者として選定し、發遣日が近づくと宮中で授戒し度縁を与えて正式な僧に認定する。發遣当日、清涼殿で仏舎利等を天皇が拝見する御覽がある。

第四章では、主要な即位儀礼の特色・変容を把握し、その中で一代一度仏舎利使の特異性を見ることである。必須の即位儀礼としての踐祚・即位礼・大嘗祭、陰陽道的即位儀礼としての八十島祭と羅城祭、仏事の即位儀礼として一代一度仁王会、神事の即位儀礼としての一代一度大神宝使、神仏習合の即位儀礼としての一代一度仏舎利使になる。平安時代の即位儀礼の変容は、大王時代の旧例が踐祚・即位礼・大嘗祭で整理・統合され、八十島祭は当時日常的に浸透していた陰陽道の影響を受けた。密教が仁王会で付加され、神社の神階秩序ができ、天皇と神の直接的なつながりを強化するために大神宝使と仏舎利信仰を取り入れた仏舎利使が成立した。

第五章では、一代一度仏舎利使の成立と終焉の様相を歴史的に位置づける。宇多天皇即位時から旧来の即位儀礼に加え一代一度と呼ばれる即位儀礼(仁王会・大神宝使・仏舎利使)が企画され、天皇即位を支える新しい儀式と意義付けられた。また文徳天皇の頃から神の世界では二十二社・一宮制など神階制が整えられ、仏の世界では神との融合を求めて神仏習合の現象が神宮寺・神前読経など多方面方面に広がり、仏舎利信仰も高まった。平安時代末期、源平の合戦で神器が失われ、承久の乱で天皇の権威と経済力は低下した。もはや全国的な神社奉獻は経済的に人的に不可能となり、鎌倉後期、仏舎利使を含む一代一度儀礼の廃絶となった。伏見天皇の代から即位礼に即位灌頂が定着した。失われた神器の神威に代えて、天皇自身と大日如来(=天照大神)が同体になることで天皇に神仏の権威を付帯させる儀式である。ここに一代一度仏舎利使は終焉を迎える。

終章では全体の内容を総括すると共に、奉獻された仏舎利はどうなったかを推考した。仏舎利は御神宝と同様に扱われ、人目に触れぬように社殿に秘蔵され、舎利会などの信仰の対象になることはなかったと考えられる。今後の課題として、仏舎利信仰と極楽往生の事例研究、諸社片字と神階制の関係、宇多天皇の宗教観、聖遺物としての仏舎利の性格、などがあげられる。